

かあちゃん

サルスベリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネタを思いついた以上は、書かねば。誰もが一度は、こう聞こえたことがあるはずのネタを思いつき、それをフワツと書いてみました。

※俄か知識が馬鹿やって書いてしまいました。寛容な方以外は読まないことを推奨します。後は自己責任でお願いします

目次

かあちゃん

1

かあちちゃん

ヒーローの条件ってなんだろう。

緑谷出久は、時々そんなことを考えてしまう。

人を助けること、誰かに頼りにされること、悲鳴を上げた人たちのために立ち上がること。

誰かの『助けて』という声にこたえること、それがヒーローの条件。

だとしたら、彼は間違いなくヒーローだ。

「行くぞ」

背後からの声に、出久は答える。振り返り彼の背中を見つめる、何処までも高く何処まで頼もしく、それでいて振り返る視界には情熱が燃えている。

「うん、かつちゃん」

答えながら、出久は思い直す。

違う、爆発だ。誰もが引きつけられるような、まるで夜空に咲く花火のように。周辺を明るく照らし、人々を引きつけ、夜空の闇を『俺が照らすためにある』というように。

嘆きも絶望も、悲鳴も悲哀も。すべての深い闇を明るく照らす爆発の光。人は彼をこう呼ぶ、『情熱のヒーロー』と。あるいは。

爆豪勝己と緑谷出久の二人のすれ違いと、お互いが過剰反応する原因は何だったのだろうか。

幼い頃、常に皆の前を歩いていた爆豪勝己が、小川で転んだ時の一件。出久が手を差し伸べた時に、彼は自分が『誰かに助けられる弱い存在』に思えたのかもしれない。

その一件があつて、二人の反発が始まったのかもしれない。しかし、この世界ではそれがそのままでは終わらなかつた。

「あ……」

出久が流された結果によって。

いきなりの流木が彼を倒したとか、急激な水位の上昇があったとか、勝己が手を握り返して二人して倒れて溺れたとかではなく。

彼がうっかりと足を滑らせて、そのまま浅い川なのに慌てて溺れて、流されていった。「……デクうううう!!」

慌てて追いかける彼の前で、緑谷出久は溺れて流されて行って、そのまま救急車にて搬送、病院へと運ばれていった。

臨死体験を経た彼は、ふとした瞬間に個性に目覚めたので、結果オーライといったところかもしれない。

出久自身としては、個性が発現して万々歳だろう。

しかし、爆豪勝己にとってはそれは重大な精神的負担になってしまった。

彼は考えた、自分が近くにいたのにこいつを助けられなかった。目の前にいたのに助けられなかった、死にかけた。生き返ったが、それは結果論でしかない。

自分が弱かったからと、自分を責め続けた結果、彼は捻じ曲がったように考え方を変えた。

強くあらねば。

その後、爆豪勝己は燃えた。まるで自己の個性、『爆発』のように情熱を燃やしてあらゆるものを吸収していった。

「爆豪、何を読んでるんだ？」

ある日、先生は授業中に関係ないものを読んでいる彼に、呆れた顔をしながら問いかけた。

「量子物理学の研究データです」

ビシツと空気が凍る。誰もが何を言っているんだ、こいつという顔で見つめる中、彼は『英文で書かれた研究データ』を読み進める。

「おまえ、今、何年生だか解るか？」

「小学二年生ですが、何か？」

真つ直ぐに答える彼に、誰もが深々と溜息をついたのでした。

その後も、爆豪少年の暴走というか、気の迷いというか、あるいは情熱の爆発か、捻じ曲がった決意の爆走か。

最後が一番、彼らしいかもしれないが。

色々と本来の彼から捻じ曲がった爆豪勝己の中でも、もつとも変化したものが一つあ

る。

それは、彼が得た教訓から発生したものだ。

「デクうう!!」

「へ?」

「おまえどこ歩いてやがる!!」

「え? あれ?」

出久、はっとして気づく。自分が空中を歩いていることに。

緑谷出久、臨死体験の結果、得た個性『道』。

何処であつても、空中だろうと宇宙空間だろうと、彼が『歩く』と考えた場所に彼の道が出来る。

その道は彼が認めた人しか歩けない。

強力ではないが、使い方によっては絶対的な防壁になる能力なのだが、本人がまだまだ制御できずにいるため、こうやって空中歩行してしまう。

その度に勝己に止められ気づかされて、そして落ちる。

「うわああああ?!」

「だから何してやがる?!」

空中に勝己が受け止め、そのまま地上に落下。

「あ、ありがと、かつちゃん」

「てめえ！ よく考えて能力使いやがれ!!」

怒鳴りながらも出久の体をチエツク。傷はない、脈拍正常、よし大丈夫。

素早く確認を終えた彼は、速やかに立ち上がり出久を起こす。

「本当にありがとう」

「おう」

彼は、『過保護』となっていた。

その対象は出久だけに留まらない。彼の周囲、彼を慕う人達、その人たちを『守らねば』と考え、その結果『過保護』となってしまうた。

彼の過保護は止まらない。

時間の流れと共に彼の過保護は増殖していく。

「爆豪、お弁当忘れたんだけど」

「てめえらは何してんだ?!」

重箱を机の上に置く爆豪勝己、小学五年生。すでに一流シェフ顔負けの料理を作れるようになっていた。

「爆豪、これなんだけどき」

「あ、貸してみろ」

工具箱を片手にエアコンを修理する爆豪勝己、中学一年生。多くの修理工場から声がかかるくらいに技術を手にしていた。

「爆豪、イタリア語ってできたよな？」

「俺は便利な辞書じゃねえ、どれだ？」

悪態つきながらも、クラスメートが差し出す本を翻訳していく爆豪勝己、中学二年生。二十四もの言語を操り、古代語さえも翻訳しているため考古学者から『是非』と声がかかっていた。

こうして彼は周囲の人々を『過保護』を振りまきながら、実力を増していった。その結果、困った人は『爆豪を頼れ』といわれるようになって。

やがて。

「あ、かっちゃん」

「なんだよ、デク」

昔馴染みの彼が勝己をそう呼ぶので、彼の過保護と合わせてこう呼ばれるようになった。

「あ、かあちゃん」

「誰がかあちゃんだナードども!!」

怒声を振りまきながら、彼が自作した秘密道具入れの『四次元ポケット』を持ち出す

彼の姿は、まさに『オカン』だった。

そして彼は雄英へと進む。

過保護のまま、能力を鍛えながら、必死に突き進む。

彼の情熱に当てられ、多くのヒーローの卵たちが、がむしやらに突き進んでいった。

爆豪勝己、彼は『情熱のヒーロー』と呼ばれている。

あるいは。

「オカン、どうすりやいい?！」

「かあちゃんどうすればいいの?！」

「かあちゃん、何処にどうなるの?！」

「かあちゃん!」

「だああああ!! 誰がかあちゃんだクソナードども!!」

『オカン』と。